

廃名『莫須有先生伝』訳稿（一）

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan : A Transportation (1)

張 雪 晶*・山田 史生**

Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要 旨

廃名（1901～1967）の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廃名集』第2巻（北京大学出版社）所収に拠る。

キーワード：廃名 周作人 莫須有先生伝

『莫須有先生伝』序¹

食事にかんしては加齢とともにふえるということはあっても、年齢については寿命がどこまでもびるというわけにもゆかず、さらにものの見方ということになると変わりこそするけれども、その変わりかたときたら「新しいものが古くなり、古いものが腐る」というのがおさだまりの流れである。ところが小耳にはさんだところによれば、腐ったものが珍しいものに変わることもあるらしい。腐った草がホタルになったり、腐った木から芽がでたり、スズメが海にはいってハマグリになったりするというのだから、まことに珍しいといわざるをえないが、もうちょっと身近なたとえをあげてみるならば、ブドウが酒になるなんていうのはどうだろう。ブドウは果実としては死んで、酒として生まれてくるのである。このことについては果実が好きなひとと酒が好きなひとでは受けとめかたがちがってくるかもしれないけれども、けつきょくのところどっちも正しいのである。ブドウ自身にとってはどうかというと、しょせん知ったこっちゃないのであって、ブドウにしてみれば木といっしょに腐ろうが、おのれの子孫をふやそうが、はたまた酒になろうが、なるようになるだけの話でしかないわけだが、とはいえた偶然にあるだけのブドウをもちいて必然のこととして酒をつくるというのであるから、これはひとすじの運命の流れであるとみなしてもよかろう。

ここ数年来、わたくしはちっぽけな文集をせっせとつくってきた。ひとつは『談龍集』『談虎集』、もうひ

とつ『永日集』、さらにもうひとつ『看雲集』といったありさまである。はなはだしいかな、わが衰えたることや（『論語』述而）。古人はいっている「雲は龍にしたがい、風は虎にしたがう」と（『易』乾）。語りくちはいくらか熱気をおびているとはいえ、「日がな一日のんびりやろう（且つ以て日を永うす）」（『詩』唐風・山有枢）とおもったとたん、まるっきりのほほんとしてしまう。『詩』にはこううたわれている（王風・兔爰）。

かしこいウサギはのんびりと
はじめなキジはとっつかまる
かつてはのんびりできたのに
ちかごろいろんな目にあうよ
このまま死ぬまで寝ていたい

どこかの君子が生きているのも楽しじないとわが身をうれえてこの詩をつくったのかどうかはわからないけれども、とにかく世をはかなんだあげくにヤケクソになったとみえ、どうやら「ぶらぶら歩いて流れのつくるあたりまでゆき、のんびり雲がわくのをながめている（行きて水の窮まる処に到り 坐して雲の起る時を見る）」（王維「終南別業」）といったティタラクになってしまったようである。むかしの友だちがいうには、まずは病気だということに気づければよろしく、もし『閉目集』なんていうものが書ければさらによろしいということらしい。わたくしはその境地にはまだまだである。ちがう友だちからきいた話によれば、あ

* 弘前大学大学院教育学研究科
**弘前大学教育学部国語教育講座

1 『周作人散文全集』第6巻（江西師範大学出版社）所収に拠る。

るひとが夜中にぴょんぴょん飛びはねるノミをつかまえ、それから髪の毛を1本ひっこぬいて（やたらと髪がながいのであるが、というのもこれは清朝のころの話だからで）そいつをノミの首にくくりつけ、1本の髪の毛にだいたい8匹のノミをくくりつけるわけだが、なんとその間隔はほぼいっしょであるということで、なるほどそれくらいの技能があれば『閉目集』なんていうのも書けるにちがいなく、真っ暗な穴のなかでもピアノが弾けるというふうに、なんでもござれの自由自在だろうが、わたくしはてんでお呼びでない。百里をゆくものは九十里をなればとす。わが衰えはわたくしに雲をながめることをそそのかすばかりで、ついぞ道理のなんたるかを教えてくれようとはせず、せめてノミを髪の毛にくくりつけようにも、包丁（『莊子』養生主）よろしくノミのすがたの丸ごとをとらえることもかなはず、さりとてわが衰えはいかんともしがたいといふほどでもなかつたりする。

わたくしの友だちのなかには、わたくしより若いにもかかわらずわたくしよりも文章の道理のなんたるかをわきまえているひとがあるから、わたくしがここまで書いてきたところはすべからく訂正すべきなのであって、たとえば廢名くんなどはそのひとりである。いささか無理をしていうならば、わたくしの『永日集』はかれの『桃園』にあたり、『看雲集』は『棗』『橋』にあたるといえようが、わたくしの書いたもののなかに『莫須有先生伝』にあたるものはない。ほとんどのひとが『莫須有先生伝』はわけがわからんといい、わたくしのところにまで問い合わせたひともいるくらいなのだが、わたくしの読みがひとよりもすぐれているというわけでもないので、しようがないから著者にたずねてみたところ、答えるべきことはすべて書いてあるといわれ、問うても問わなくてもいっしょというような按配になってしまった。それはそうとわたくしは『莫須有先生伝』がじつは好きなのである。『莫須有先生伝』を読んでいると、おさないときに私塾でいろんな本を暗記させられたことをおもいだすのだが、たとえば「兼葭蒼蒼たり」（『詩經』秦風・兼葭）のところまで諳誦したら、いきなりストップしてしまい、どんなにからだを左右にゆらゆらさせてみても、なんにも浮かんでこなかったのに、先生がいつも折檻するのにつかっている板でポカリとやられた拍子に「白露霜と為る」と妙にすんなり口からでてきた。やれやれ「兼葭蒼蒼たり」のあとには「白露霜と為る」がくるにきまっているのに、どういうわけかポカリとやられるまで「白露霜と為る」がでてこないわけで、

まるでポカリとやられることと詩の文句をおもいだすこととが有機的にむすびついているかのごとくであって、まさしく「老学の一得は蒙学の一嚇に異なる」といったところである。『莫須有先生伝』の文章のすばらしさは、これを旧式の評語でいうならば「情は文を生じ、文は情を生ず」というところにある。ひとすじの水の流れがあり、すべてのものが東へとおもむき、海へとそそぎこむようでありながら、その流れはいかなる場所であろうとも経めぐることを厭わず、あらゆるくねくねと曲がりくねった支流にもくまなくゆきわたり、あらゆる岩石や水草などをことごとくなぶってからすんでゆくのであって、べつにそうすることが流れるうえでの大事なことではないにもかかわらず、それをはぶいてしまうと流れはちがうものになってしまふといった風情のものなのである。それはまた風のようでもあり、風のようといえだれしも莊子をおもわざるをえないわけだが、そういえば莊子の言葉のなかでも風について語ったものはもっとも好らしいものだから、よろこんで引かせてもらうとしよう（『莊子』齊物論篇）。

大地の吐く息、それが風。吹いていなければどうということもない。ひとたび吹こうものならあらゆる穴という穴はどよめく。ひゅうひゅうと鳴る音をきいたことがあろう。ざわめく山の奥ふかく、百かかえもあるうかという大木の穴、その形は、鼻のようなもの、口のようなもの、耳のようなもの、枠のようなもの、杯のようなもの、臼のようなもの、くぼみのようなもの、みぞのようなもの、さまざまのものがあり、その音は、吼えるようなもの、唸るようなもの、叱るようなもの、吸うようなもの、叫ぶようなもの、泣くようなもの、微かなもの、悲しげなもの、さまざまのものがある。まえのほうが「うおっ」とうなれば、あとのほうで「ごおっ」とこたえる。風がそよそよと吹けば穴はやさしくこたえ、風がごうごうと吹けば穴ははげしくかえす。やがて風が鳴りをひそめれば、もうもろの穴はひっそり静まりかえる。あとは木々がざわざわとそいだり、ゆらゆらとゆらいだりするさまをみるばかり。

莊子の言葉には風についてのものだけでなく、ほかにも好いものがいっぱいある。そもそもこの世に風よりもむつかしいものがあろうか？ ところがひとびとは風がむつかしいなどとは微塵もおもわないらしく、風がつよく吹けば風がつよいといい、風がよわく吹け

ば風がよわいといって平然としている。いったいなんでだろう？ 風の吹きようはそれぞれちがっているけれども、どれもみなおのおの然るべくして然るのであって、つまりみずから然ることをえらんでいるわけで、だとすると然るべくさせているものはだれなのであろうか？ 鼻のようだったり、口のようだったり、耳のようだったりする穴は、もともと然るべくそこにあるだけであって、その穴のせいで樹木が朽ちてるのだと、あるいはその穴にサソリやムカデをかくまつたりしているのだと、だれもいちいち気にするものはないけれども、いったん風が吹きはじめると、あらゆる穴という穴をむなしく存在させるのはもったいないとでもいわんばかりに、穴はいっせいに鳴りひびきだし、吼えるようなもの、唸るようなもの、叱るようなものといったふうに音をたてはじめ、サソリが吹き飛ばされようがムカデの息が詰まろうがおかまいしなのである。だれもみなそれが風の音だということをわきまえているばかりで、いったいあの鼻の穴のようなところから鳴りひびいてくる怪しい音がはたして公のものなのか私のもののかなんてことを気にかけるものなどまったくみあたらず、それはちょうど流れのうえに水草がただよっているのをみても、そうやってただよっていることにどういう意味があるのかなんていうことをだれも考えもしないのといっしょである。よい文章を書くようなひともまたそうであって、かれは書かれた言葉の意味・文字・音声・典故のなにもかもをいい加減にはあつかいたくないので、いつでもどこでも言葉というものを愛をもって吟味しており、ゆらゆらとただよう水草であればゆらゆらとただようように書き、ひゅうひゅうと鳴っている穴であればひゅうひゅうと鳴っているように書くのだけれども、しかしながらそういうふうに流れたり鳴ったりしているのでないならば、あるいは海のほうにむかったり、はたまだ空気の薄いところにいたり、そのまま旅をつづけてゆくばかりなのである。これこそが「文は情を生ず」というありようであり、またそういう「文は情を生ず」というスタンスこそが古文を書くひとが古文を書くというのとは異なっている所以であって、これこそが新しい散文のなかから新しいスタイルが生まれてくるということにほかならないのである。

これがわたくしの『莫須有先生伝』にたいする意見であり、これはまたよい文章についての理想をのべたものもある。もっとちゃんとすることを書くべきだとはおもうものの、なにぶん生まれついての天分にはかぎりがあるから、無理して書いたところで勞おおく

して功すくなしという仕儀になるのが才子であるし、おそらく「まえかとおもえば、たちまちうしろ」（『論語』子罕）と感ずることをまぬがれまいから、おそらく『閉目集』というような文章がいくつか書けるような境地には、わたくしはまだまだ遠くおよばないということなのであろう。

民国二十一年二月六日 于北平苦雨齋

序

『莫須有先生伝』がいままさに正正堂堂と世に問われようとするにあたり、ほとんど挙国一致といったいきおいで、ぼくは序文を草することをもとめられた。どうやら「わかりにくい」というのがその理由らしい。ぼくはハタと困った。そもそも他人の伝記を書くというのは、当たり前のことだが、その人物の事跡についてありのままに書くということである。もしほくの書くものがわかりにくいとすれば、それは莫須有先生という人物がわかりにくいかからであって、そうであってみれば『莫須有先生伝』がわかりにくくなるのも無理からぬところである。しかもそのわかりにくいところが、じつはこの伝記の妙味にほかならなかったりする。読者におかれでは、ひたすら細心の注意をもってこれを味わい、そして考えてみればよいのである。じっくり味わい、考えてみて、なにかしら得るところがあれば、それなりに生きているのがおもしろくなる。この世のなかにおもしろいことなんてそうそう転がっていやしない。ぼくが序文なんていうものを書きたくないのも、諸君がおもしろがることのジャマになるんじゃないかとおもうからである。ところが昨日、苦雨老人が『莫須有先生伝』のために書いてくれた序文をみたものだから、ぼくは急になにか一言いいたくなってしまい、そうなるとどうしても莫須有先生についての批判めいた口調にならざるをえないでのある。この伝記をいよいよ書きおえようかというとき、よろこびで胸がいっぱいになったことをおぼえている。ところがそのうれしさの加減はというと、書きはじめたときほどのものではなかった。これはぼくの莫須有先生にたいする信仰がいつのまにか薄れてきたということのいつわらざる証拠である。書いているときには、「臣の好む所の者は道なり。技よりも進めり」（『莊子』養生主）という庖丁解牛のエピソードをおもいだして、その庖丁の境地をぼくの莫須有先生にたいする讃辞にしたいとおもったりもしたのであるが、それも書きすすめるうちにだんだん消えうせてしまつ

た。ぼくは気づいてしまったのだが、いくら先生の運勢をおもんぱかってみたところで、その生いたちを知りつくしているわけでもなし、みだりに吉凶を占つたりしないほうがよいのである。これが宝クジであればだれだって何万分の一かはある可能性があるけれども、十九年ものあいだろくに料理をやってもいないのに庖丁の話をもちだしてみたところでどうしようもない。もっとも、これはぼくの苦雨老人へのちょっとした文句なのであって、読者はべつに気にならさらなくてもけっこうである。じっさい『莫須有先生伝』はまちがいなく考るに値するとおもう。これを序文とする。

民国二十一年二月八日 著者

第一章 姓名・年齢・本籍

莫須有（あるかもしれない）先生というからには、そんなひとはこの世にいないってことなわけで、それって適当にでっちあげたっていうこと？ そうなんだけど、それがどうかした？ だってヒマをもてあましていたし、それに『駱駝草』という同人誌をはじめたばかりで、そこにのせる文章を書かなきゃいけなかつたから、ちょうどよいかから『莫須有先生伝』を書けばよいとおもいつたっていうわけ。それにずっとまえから莫須有先生についての猛烈にくわしい伝記を書きたいとおもっていたしね。と、こんなふうにいうと、ひょっとすると頭がこんがらかるひとがいるかもしれない。そういうひとがホントにいるの？ そういうことはくれぐれも気になさらぬように。ぼくがいるといってみても、いないといってみても、どっちみちいっしょのことじゃない？ ぼくがあなたをダマしさえしなければそれでよい。しかもダマすかダマさないかはぼくの勝手であって、あなたには関係のことだ。ところでこの莫須有先生とやらはいったいどこに住んでいるのかというと、とある年寄りの漁師がやっこさんの住まいをたずねたということ、このことだけはもう絶対にまちがいないということをぼくは知っていて、そういうわけで別のひとのことはさておき、この養をまとったジイさんだけは、ぼくの文章を読めばたちどころに「ああ、やっこさんの伝記を書くつもりだな」とピンとくるにちがいないわけで、まあまあ、そうイライラしないで、「やっこさん」っていうのが気になっているんでしょ？ あのあとジイさんは寝そべって、うつらうつらしていたんだけど、ひとつ溜息をついたつけ。そういえば昨日もジイさんが家

のなかでだらだらしているのを、ぼくはこの目で見たんだけど、オンドルのうえに寝そべって、枕もしないで、だらだらしているがたは、ぼくだったらそんなふうにはしたくないけれども、きっと今日もそんなふうであるにちがいない。なにをいってるのかって？ やれ年寄りの漁師がどうだの、やれオンドルがこうだのって、いったどこの土地の話？ そもそも年寄りの漁師ってだれ？ ああもう面倒くさいなあ、ホントのことが知りたけりや、ご自分で研究なさればよいわけで、この研究するという営みについて、ぼくは反対するつもりはなくって、ただし道理をわきまえたうえで研究する場合にかぎるけれどもね。ものごとには道理がつきものだから。

ぼくは莫須有先生のもともとの姓は王にちがいないっておもいついていて、そのことがぼくはすぐうれしくて、北京大学を卒業できたことよりもうれしいくらいだった。というのも、ぼくは莫須有先生はかつて小説をひとつ書いたことがあるということを知っており、しかも偉大な小説というものはたいてい作者の自伝にきまっているし、じっさい偉大かどうかはさておくとしても、この小説はかれの処女作で、その主人公が王道生、つまり王という姓なわけで、こいつがまたいかがわしい壳春宿にあがる連中のことをそれはもう徹底的に忌み嫌っていて、とはいへ王道生はただ煩悶してみせていたというだけで、ぼくがおもっているほど気にかけていたわけじゃないのかもしれないんだけど、そういう印象がぼくの脳裏にはこびりついていて、そういえばずいぶんむかしのある日、ぼくは親戚にあうために警察の派出所をおとずれたことがあって、どのへんにあったのかは忘れてしまったけど、とにかく遊郭ひしめく韓家潭からそう遠くないところにその派出所はあって、なんの気なしに名簿をめくっていたら、なんの気なしに「王道生」という3文字とでくわしてしまったわけで、ここに書いてある名前はなんの気なしに「王道生」ということらしく、たしかに戒厳令がしかれているあいだは女郎を買ったものはみんな名前を書かなくちゃいけなかつたので、「あんたの住んでるところにも名簿があるだろ？」といわれてみれば、そうだったような気もするが、たしかその名簿のことで警察に腹をたてたこともあったような気もして、というのもぼくのことを無職ときめつけるもんで、すんでのところでブン殴りそうになったことがあったんだけど、それはそうとこの期せずしてくわした「王道生」こそが莫須有先生にちがいない

とピンときてしまったというのも、この王道生とあの王道生とは完全に関係があるとぼくが信じるだけの理由をぼくはもっているのである。あとになって知ったのだが、かれはちゃんとひとつところに定住していて、そこは牧童が「三槐堂」¹をはるかに指さすといった風情のところで、このことからも王という名字の件についてはもう絶対のうえにも絶対にまちがいないことなのである。ハッキリいわせてもらえば、莫須有先生の住んでいるところはド田舎である。だれも知るまいが、蓑をまとった老人がわざわざド田舎にでむいて、かれの住まいをたずねていってみたら、じつは3本のエンジュの木じゃなくて4本のエンジュの木だったらしく、さらにいうとその屋敷ときたら門のうえに表札すらかかつておらず、ただ門前には4本のエンジュの木があるばかりで、しかも一部屋と半分をただ間借りしているだけであって、おまけにその住まいには大家もいっしょに暮らしているといった身分であつてみれば、三槐堂はたしかに莫須有先生の住まいではあってもその所有ではないっていうことになってしまい、ここにおいてハッキリしたのは、派出所におけるぼくの大発見はまったくの見当ちがいだったということで、われながらわらってしまう。

莫須有先生の年齢はというと、それがさっぱりわからなくて、莫須有先生ときたら自分でも自分がいくつであるのか数えられなくなっているといった始末で、それはちょうど田舎にはロバをはしらせることが大好きなのが大勢いるようなもので、なにせ田舎にはロバで駆けずりまわっている手合いが掃いて捨てるほどいて、だれもかれもが石の橋のうえにたむろしてロバの買い物手を待ちかまえており、そのだれもかれもが莫須有先生のことを見知っているわけで、そこへ莫須有先生がステッキをつきつき、ふんぞりかえって坂をおりてこようものなら（そこは山道なので坂をおりてこなけりやならないのである）あたりはまるで天変地異にでも見舞われたかのような具合になるのだが、ロバたちはみんな1本の縄でつながれているもんだから走ろうにも走ることもならず、なにぶん人間と畜生とは考えているところがちがっているわけで、てんやわんやの大騒ぎになって、鶏口となるも牛後となるなけれ

とばかり、馬は天をあおいでいななき、風はたちまち吹きすさび、莫須有先生のまわりを喧噪がとりまくのだが、まったく意に介せずといったふうにパッと手でふりはらい、それは兵隊が敬礼をするようにといおうか、はたまた偉い政治家が演説をぶつのようにといおうか、とにかくパッと手をふって

「1頭だけ、くれ」

というと、その1頭にまたがって、さっさと去っていってしまい、あとにのこされた連中がそのままを論評はじめるなかから

「あのジイさんはなかなか立派なひとだ」

という声がきこえてきて、その声の主はもっとも冗談のわかる男で、かれは莫須有先生のことをよく知つており、いつだって莫須有先生のことをからかうのである。

「やっこさんの名字はなんだとおもう？ いつもひとりぼっちで、しょっちゅうウロチョロしているのをみかけるけどさ。いつだったか警察のやつらがある男のことを何日もつけまわしていたというウワサをきいたことがあるんだけど、ひょっとするとやっこさんがそうなのかも。もしあのジイさんがそうだとしたら、オレのみるところ、そんなにわるい人間じやなさそうだから、なにかのまちがいだろう」

莫須有先生は風に吹かれてそぞろ歩きすることが大好きで、どんなに卑しい仕事でもイヤがらず、どんなに貧しくても偉そうにせず、どんなに金持ちでも礼儀たやすくありたいというふうであって、夫子よろしく莞爾としてわらわざるをえないといったひとである。²編集のかたに注意をうながしておきたいのだが、くれぐれも莫須有先生が「四書」をまちがっておぼえているなどとはおもわないでいただきたいので

2 曰く、莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞¹に風し、詠じて帰らん。夫子、喟然として歎じて曰く、吾れは点に与せん（『論語』先進26）子曰く、富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れも亦た之を為さん。如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん（『論語』述而11）子貢曰く、貧にして諂うこと無く、富みて驕ること無くんば何如。子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、富みて礼を好み者には若かざるなり。子貢曰く、詩に云う、切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し。其れ斯れの謂いなるか。子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて来を知る者なり（『論語』学而15）子、武城に之きて絃歌の声を聞く。夫子莞爾として笑いて曰く、鶏を割くに焉くんぞ牛刀を用いん。子游対えて曰く、昔者偃や諸を夫子に聞けり。曰く、君子道を学べば則ち人を愛し、小人道を学べば則ち使いやすし、と。子曰く、二三子よ、偃の言、是なり。前言は之に戯れしのみ（『論語』陽貨3）

1 三槐堂とは北宋の王祐が建てた堂の名。王祐が庭に3本のエンジュの木を植えて「のちに子孫に3人の大臣ができるだろう（吾之後世、必有為三公者）」といったことにより、ひとは「三槐の王氏」と称した。三槐は王姓の典故とみなされる。ちなみに廢名は「牧童遙かに指さす杏花の村」（杜牧「清明」）をふまえて書いている。

あって、というのもかれは「どんなに貧しくても偉そうにしない」というのはむつかしいことだとおもっていて、とある隠者が「とかく文人というやからは偉そうにしたがり、そのくせちっとも道理をわきまえとらん」といっているとおりなのである。とはいって、うしろのほうから「あのジイさんは」という声が耳にはいってきたもんで、つい油断してひよいとふりむいてしまい、その拍子にすんでのところでロバから落っこちそうになり、「なんでまたあいつは吾輩のことをジイさんとよぶんだ?」こうみえてひとを好きになるこころはまだ枯れきっておらんつもりだが、なんだかいつべんにガックリきてしまった。やんぬるかな。それはあんたの勘ちがいであって、莫須有先生ったらひょっとしてまだ若いとでもおもってるの? それってまるっきり自殺だね。莫須有先生はロバの背中にまたがって悲嘆にくれるのであった。「もし吾輩がジイさんであるならば、どういう見てくれでなければならんのだ? こうヒゲなんぞをたくわえて」とヒゲをしごこうとしたものの、そういえばヒゲをたくわえていないのであった。莫須有先生はどうしてもヒゲをしごきたくてたまらず、とはいえた人のヒゲをしごいてみてもどうにもならん。なにがなんでもどうにかしたいが、なんともはやどうにもならん。ロバにゆられる自分のすぐたをながめてみたくなったが、これまたどうにもならん。これが若い娘さんが郊外におでかけするということであれば、きっとハンドバックのなかには手鏡なんぞがしのばせてあって、いつでも化粧をおしたりするのであろう。しかしそういうのは誘拐される危険がいっぱいだよ。「よっぽど見苦しくさえなければ、それでかまわんだろう」とひとつの大問題がじつに軽やかに解決されたのであった。「吾輩はもうながいこと、そりやあもうずいぶんながいこと、父母の顔をみておらん。吾輩には兄がひとり、弟がひとり、姉がひとりいるが、姉はとうのむかしに40をすぎたときいたことがあるけど、吾輩にとってはいつまでも若い娘っこのままさ。われわれはいまだにおさない子どものまんまだ。吾輩のなつかしの故郷、ああ、すっかり忘れてておったなあ」おやおや莫須有先生ときたらジイさんどころか、まるっきり子どもみたいであるが、わけもなくあふれてくる涙をぬぐうさまは舞台のうえの仕草そっくりだなどと批評されたくないね。と、ボトンという音とともに莫須有先生のもっていたステッキが落っこちて、おどろいたロバはたちすくみ、ピクリともうごこうとしなくなってしまった。

「莫須有先生、大丈夫、おいらが拾ってやるから」

「そいつは捨てたんだから、欲しけりややるよ!」

「この年寄りがつくのにもってこいのステッキは、山椒の木でつくられているところをみると、どうやら妙峰山で買ったもんだね? 銅貨でいくらだった?」

なんていうふうなことを書いていると、莫須有先生がまるで実在の人物であるかのようにおもわれかねなくて、するとこの伝記はすっかり信用をうしなってしまうことになりそうなので、莫須有先生はあわてて茶々をいれて話の腰を折らざるをえなくなり

「はあ? 妙峰山? そんな山はこれっぽっちも知らんぞ! そのステッキは吾輩の友だちからもらったんだ!」

「その友だちってのは、昨日おいらのロバにのってあんたの家にいったひとのことかい? あのジイさんもなかなか立派なひとで、たしか碧雲寺に住んでいて、陰曆の四月八日においらのロバで妙峰山にゆくつもりだったんだけど、あいにくとその日はおいらもロバにのって町のほうまで食糧をはこばなきゃならなかつたんだ」

「どうやらあんたちは、だれかれかまわずジイさんとよぶみたいだな」

そういうて莫須有先生はうれしそうな顔でしたが、かれの友だちというのはうんと若いエッセイストで、スーツを着たりネクタイを締めたりするのがすばらしく素早くできて、莫須有先生はかれのことをとてもかわいがっており、あうとすぐさま握手をかわし、いつだったか「なにはさておき恋愛というのは大事なんだけど、とにかくビビることは禁物で、ひたすら誠心誠意でもって女性にぶつかってゆけばよいのであって、ヘタに知ったかぶりをしちゃいかんのだよ」とまくして、かれを非常に困らせたこともあった。ついでにもうひとつ困らせた話をさせてもらえば、こっちはまた別の若い詩人とのことなのだが、ある日、莫須有先生はわざわざその詩人をたずねてゆき、かれの机のうえに1枚の写真があるのをみつけ、それがキーツであるとわかると、莫須有先生ときたら、ふざけながら口からでまかせの冗談でもいうような調子で、もっともぼくはふざけているとはおもっていないのだが、さもキーツのことをよく知っているかのような顔をして

「こいつ貧乏人のくせにスーツを着おって!」

そう遠慮会釈もなしにいってのけて満足げにほほえんだのだが、どうやら愛すべき若い友だちがいささか傷ついたということには気づいていないらしく、といでのも若い詩人はちょうど兆昌毛織物店にスーツを注

文したばかりで、ところがまだ代金が都合できなくて肝腎のものを受けとることができずにいるもんで、はたして明日の友だちの結婚式に着てゆけることやらといった瀬戸際だったのである。もし莫須有先生がこのことを知つてしまったら、一晩中まず絶対に一睡もできないはずで、「神さま、吾輩はもう金輪際、これから一言も口をきかんほうがよいのでしょうか、いったい人間として生きてゆくというのはむつかしいしたらありやしない、どうしてもドジをふまずにおれんのです」

第二章 莫須有先生、田舎にゆく

莫須有先生がなんでまた田舎にゆくのかについては、諸説紛々としていて、田舎の警察でもしらべてみたが理由がわからんということなので、ぼくも穿鑿しないことにしたい。蓑をまとった老人がかれのもとをたずねたとき、ふたりともだまりこくったままだったが、それはこころのかよいあった莫逆の友どうしだからで、莫須有先生はたった一言だけ「町よりも田舎のほうが、なにかにつけて安いからね」とポツリとつぶやいたというけど、われわれはたんなる傍観者でしかないわけで、かれほどの高雅の士がそんな俗っぽいことが理由で田舎にいったりするだろうか？ わからぬことについてはしゃべらないほうがよいとはいえ、わかっていることについてはしゃべり放題というわけで、さっそくしゃべらせてもらうが、ある日、莫須有先生は田舎にいった。

町をはなれるにあたり、莫須有先生は2頭のロバをやとい、1頭には莫須有先生がのって、もう1頭にはもちろん莫須有先生の旅の荷物がのせられており、それはひとつの行李とひとくみの布団とであった。そのほかにも紙でできた小箱をもっていて、なかからカチコチといった音がきこえてくるようだが、ロバの御者にはそれがどんな遊び道具なのかさっぱり見当もつかないらしく、というのも莫須有先生はどうみても大道芸人のようにみえないでしょ？ 莫須有先生の手からそれを受けとろうとしながら

「莫須有先生、その手にもってるのはなんだい？ こっちによこしな、あっちのロバの荷物にくくりつけなきや、これから何十里ものあいだ、そうなシロバにのって一両日もかかるんだから、そんなのをずっと手にもってるのはジャマだろ？」

「こいつは吾輩の目覚まし時計で、数年前に買ったものなんだが、それから何度となく引っ越しをくりかえ

して、そのたびにこいつも引っ越しをしたもんさ。というのも吾輩は朝早く起きられないっていうことがものすごく心配でたまらんのだよ。だもんで、ほかのものはさておき、こいつだけはだれにも、たとえ家主であろうとも、もたせるわけにはゆかんのさ」

莫須有先生はいささかお疲れのようで、ひどく元気がない。これまで引っ越ししたさきの家主といえばどれもこれも年老いた女性ばかりで、そういうえば今朝早くのことだが、そこの「京東」の纏足のバアさんは、莫須有先生が引っ越しをしてバタバタしているのが気に食わないらしく、まったくガマンならないみたいだったけなあ。

「早いところ荷物をくくりつけてくれんか、吾輩はあっちで昼飯を食いたいんだけど」

「こっちのほうこそ、さっさとでかけたいよ！ もう一両日もここに立ちん坊だっていうのに、その手の箱はあんたが自分でもってくのか、それとも荷物にくくりつけるのかってたずねてから、あんたはずっとだまりこくったまんまのくせに、さっさとしろとはどういう料簡なんだ！ こっちこそさっさとそうしたいんだよ！」

なんとまあ莫須有先生ときたら、さっきたずねられてからじつは一言もしゃべっていなくて、ただボンヤリと突っ立ったまま、こころのなかであれこれ考えをめぐらせていただけなのであった。じっさいロバの御者はものすごく気がせいているようで、わめきたてる口からツバが盛大に飛び散ってくるもんで、莫須有先生はおもわず一步うしろにさがった。そうかとおもうと莫須有先生は、そのまま両方の手を腰のあたりにあてがって、ぼんやりと突っ立ったまま、ものごとの道理ということについて想いをめぐらせているのであって、いったい自分も若い時分にはともすればケンカにはしりがちであったけれども、いろいろと学んでこの歳になってみれば気性もおだやかになってきたことよ。

「この目覚まし時計は、道中ガタゴトとゆれるといけないから、吾輩が自分でもつ」

町の門から外にでてみると、おそろしい人混みで、ラクダをひっぱるものやら、肥やしを積んだ車を押してゆくものやら、なんにもしないでただ棒切れをもって突っ立っているだけの警察やらがいたが、そこにまた都合のわるいことにムチをふりふりブタの大群をはしらせたやつが突っこんできたもんで、そこらじゅうブタだらけ、ひとはひとでみな土埃まみれ、莫須有先生はというと、あわてて難をのがれ、首をのばして高

みの見物をきめこんだようだったが、すさまじい土埃だもん首をのばすにのばせず、その骨と皮ばかりに痩せほそったすがたは、まったくもって貧農さながらである。

ロバの御者はふたりいるのだが、ひとりのほうはさほど気がせいているわけでもないようで、あたりをキヨロキヨロして莫須有先生をさがしながら

「莫須有先生、ぼちぼち出発しましょうや」

莫須有先生はそのすぐうしろまで鼻をおさえながらやってくると

「吾輩はここだよ」

ここにおいて莫須有先生はずいぶんながいあいだ住んできた町にいよいよ別れをつけねばならんということにハタと気づいたのだが、そのくせなにゆえにこんなふうな仕儀にいたったのかということについては自分でもわかっていないのであった。

ちっともまえにすすめない。わざとすすまないわけじゃなくて、ロバがすすまないのである。というかロバがすすもうとしないわけじゃなくて、ひとが混みあいすぎているのである。ひとりの易者が杖をつきながら人混みのなかを歩いており、莫須有先生がのっているロバをひいている男がでっかい声で

「どけ！」

そうさけぶと、目がみえない易者は杖をつきたてたまま立ち往生してしまい、いかにも盲人らしい顔つきでもって、首をもたげ、目をななめにして

「もうちょっとおだやかにいえんかね」

「そうそう。ひとはおだやかであるべきだ。易者さん、ちょいと通してくださいな」

莫須有先生がなんとなく満足げなのは、どうやら連れのものに教訓をたれてやったつもりらしく、背中をすこしまげて、ロバの手綱をひっぱった。易者のほうも満足げにうなづくと、ちょいと身をよけた。

「易者さん、吾輩がのっておるのはどうしようもないロバでして、これがもし上等の乗りものであつたら、ああ、吾輩としてはちゃんと古式ゆかしく作法どおりにやりたいのだが、それどころかこいつときたら吾輩をすら落っことそうとする始末でしてな」

「それはそれはお気をつけて」

易者さん、あなたも気をつけて、というと莫須有先生はロバのうえでピョンピョンとあがったりさがったりしながらその場をはなれてゆく。

「ロバの御者さんよ、おまえさんまさかみえなかつたとはいわんだろうね？ あの目のみえないひとの堂々たるふるまいときたら、じつに感服させられたよ」

「みえなかつたとも！ みえなかつたら、オレも目がみえないとことかい？ こんちくしょうめ！ どこにゆこうってんだ！」

ロバがどんどん暗がりのほうにゆこうとしたもんで、御者はその尻をぴしりとムチでひっぱたき、莫須有先生もビックリしてなんにもいえなくなってしまう。

そんなこんなでダンマリのまま半里ほどもすすんだろうか、それぞれがおのののやるべきことを黙々とやりつづけるというふうであった。と、いきなり莫須有先生がなにやらボカンとした顔をして、どうやら自分では背筋をシャッキリとのばしたつもりのようだが、じっさいはロバの背中から落っこちそうになってビビッただけだっていうことはバレバレで、目のまえでロバをひいている関所の門番のように片や赤い旗をかかけ片や緑の旗をかかげているふたりにむかって

「おいおい、ゆっくり！ ゆっくり！ 吾輩の頼りはこの2頭のロバだけなんだから」

この2頭のロバだけしかいないんだからというときの莫須有先生の口ぶりは、なんだか腹立ちをグッとのみこんでいるみたいである。

「なんてこった、たった小便をするくらいの時間だつていうのに」

そういうて様子をみてみたところが、ダンマリのままなんにも反応しやしないもんで、こいつらまとめてぶつ飛ばして、どこか鉄柵のなかに閉じこめてやりたくなった。そういえばここは鉄道と大通りとが交叉するところで、ちょうど汽車がやってくるところだった。

莫須有先生がしげしげとながめてみると、御者のひとりのすがたがみえなくなつておらず、あわてふためいて、もうひとりの御者2号にたずねた。

「御者2号、おまえさんの相棒はどこに消えたんだい？ でもって、おまえさんはなんでまた消えたってことに気づきもしないんだい？」

御者2号がとんがらせた唇でもってさししめすので、莫須有先生が眉間にシワをよせながらされたほうをみると、やれやれよかった、御者1号が小便をしている。

「なにはともあれ自殺だけはしちゃいかん」

いきなり自殺がどうのこうのって、莫須有先生はひょっとして首でも吊ろうとおもつたことがあるのかしら？ まったくもってなにを考えていることやら。そうこうするうちにポッポーと汽笛をならして汽車がやってきて、ようやく踏切のむこうにわたれるという

ので、みんなの顔はよろこびにかがやいた。ところが莫須有先生はというと猫背をまるめて危ないことも忘れたかのように線路ギリギリのところまでちかづいたかとおもうと

「これは戦争にかりだされて山西までつれていかれる兵隊たちだよ。なんとまあたくさんいることか。1輜、また1輜、すわる席さえないようだねえ。どうしてあんなおびえたような目をしているんだろう。父なのか母なのか、天なのか人なのか、いったいだれがキミたちをこんな目にあわせようとするのかわからない。ついさっき町の門をでたとき、ムチをふりふりブタの大群をはしらせるやつをみたが、ムチでぶってもぶってもブタどもは町にはいるにはいられず、もぐりこもうにももぐりこむ穴もなく、おかげで吾輩は顔じゅう土埃まみれになって、そりやあもうひどい目にあったと不愉快になったもんだが、いままさに吾輩の目のまえをつれられてゆく兵隊たちにくらべたら。ああ、神よ、莫須有先生は罪をおかして、こころが痛いのですが、それは同胞たちをまるでブタといっしょのようにおもってしまったからなのでしょうか。吾輩はそうおもわずにはおれんのです。キミたちは吾輩にひとつ道理を教えてくれた。吾輩はじつはこれっぽっちも理解できないのだが、ひとはなんでまた兵隊なんぞになるのだろう？ それって犬死にむかってまっしぐらだっていうことが明明白白じゃない？ かれらだって死にたくないにちがいない。人間だれしも生きていたいものであり、畜生だってみな生きていたいものなのではあるが、われわれはわれわれが困ったことにでくわしたとき、まるで家畜のようにあつかわれることもあって、それもまた生きる道のひとつだったりもするわけで、それもまたじつに悩ましいかぎりではある。まったくもって残酷なことではないか。生きるというのは苦しいもんだよ。なにが苦しいって生と死とのあいだの一本道を生きてゆかにゃあならんわけで、キミたちがおびえたような目をしているのもよくわかるよ。戦争になってしまえば生きるも死ぬもいっしょくた、鉄砲の弾が飛んできたらもはやそれまで、野獸のようにギャアという声をあげてお陀仏になるばかり。その声のかなしいことといったら。じっさいのところ、馬・牛・羊・鶴・犬・豚、これらの人間に食われちまう家畜たちも、どれもみなギャアという声をあげて殺されるんだ。ああ、神よ、兄弟たちよ、運命よ。これまでも、これからも、吾輩はこんな目にはあわずにすむだろ。吾輩はせいぜい努力せねばなるまい」

莫須有先生はまるで自分のからだというものを忘れてたかのように茫然としていたかとおもうと、ポロリと大粒の涙をこぼすのであった。そのとき閉ざされていたゲートがひらかれ、ひとびとは肩をぶつけあい、踵をこすりあって、われさきに押しあいへしあいはじめたが、莫須有先生はというと一歩もすすめない。

いよいよホンモノの田舎に足をふみいれたわけだが、莫須有先生はひどくお疲れとみて、こっくりこっくり居眠りして、ロバの一足ごとにあがつたりさがつたり、御者もさすがに心配になったか

「莫須有先生、眠っちゃダメだよ！ どうやらあんまりロバにのったことがないようだけど、うっかり落っこちてケガをしてもオレのせいじゃないからね！」

莫須有先生はなんにもいわず、ただ目をつぶったまま。御者2号はそんな莫須有先生のありさまを横目でみながらバカにしてあざわらう。

「まったくしようがないひとだな」

「キミたちは吾輩をバカにしていないで、吾輩をもっとノンビリさせてくれてもよさそうなもんだし、それにもうちょっとゆっくり歩いたらどうなんだい。おお、みわたすかぎりの荒れ野には、ひとつ子ひとりみあたらず、こころを安静にするにはもってこいではないか」

「そういうやあ、まえにこちらで事件があったっけ」

御者1号がひとりごとをいうと、莫須有先生はつぶっていた目をあけて

「事件？ どんな事件なの？」

「ふたりの追いはぎが農民から50元をうばいとり、おまけに足をバッサリと斬ったんでさあ」

「おやおや、吾輩の腰のポケットには10元のお札が3枚はいってるけど、これは半年のあいだ修行するための資金だしなあ」

莫須有先生はあがつたりさがつたりをやめて、おもわず腰のポケットに手をやり、しまった、目のまえの追いはぎふたりに腰のポケットに10元のお札が3枚はいっていることをまんまと自分からバラしてしまった！ いってしまったものは仕方がないので、おどおどと小声でよびかけ

「いったいキミたちは吾輩をどこにつれてゆくつもりかな？ 吾輩はいまやハッキリとわかったが、どこにゆくかということにかんして吾輩はまったく自主性をもっておらんわけで、というのも吾輩がどこへゆくことになるのかはキミたちまかせであって、こうして一歩一歩すすんではいるが、莫須有先生はただキミたち

のひっぱるロバにのっていることしかできんのだから」

「莫須有先生、ほらご覧よ、むこうから嫁入りの駕籠がやってきたぜ」

「御者2号、おまえさんは相方よりもちよいと人間ができるおるとみえて、というのもやっこさんは吾輩をともすればビビらせてくるけど、おまえさんはリラックスさせてくれるようだ。うん、あの嫁入りの駕籠がこの荒れ野をゆくありさまときたら、ものがなしいというか、ひとつも華やいだところがなくて、とはいへ貧乏くさいっていうわけでもなく、いずれにせよ町でみかける駕籠とはずいぶんちがうようだね。どこに嫁いでゆくのかは知らないが、あの花嫁はお腹がすいていないのかな？ どれくらい遠くからやってきたのかしらん？」

「莫須有先生、もしかして腹がへったのかい？ まだ道のりのようやく半分くらいしかきていないけど」

「腹はへっとらんよ。あの花嫁さんは背が高いのか低いのかさっぱりわからんが、もし別嬪さんだったとしたら、なんとしてでも背の高いひとであってほしいわけで、というのもそうだったら洛水の女神が波をのりこえてゆるやかにゆくさまは薄絹の靴から塵がたちのぼるようだという風情とピッタリだし、¹ そうでないとすれば、ああ、神ならざる人間はみなチビだっていうことになりそうで、それって吾輩はイヤだなあ」

「莫須有先生、チビのほうがむしろ好都合っていうこともあって、たとえば服をつくるのに布がすぐなくですむよ」

「御者2号、デタラメをいうんじゃない！ それ以上なにかいいたら、ぶつとばすよ！」

莫須有先生はものすごく切なくなつたのだが、どうして切ないのか自分でもさっぱりわけがわからず、ひょっとするとどこかに莫須有先生のことを愛している娘さんがいて、そのひとはちょっとだけ背が低いのかもしれない。

目路のかぎりなにひとつ目につくものとてなく、どこまでも一本道がひたすらづくばかりであったが、道ばたをみると5本のかかえきれないほどでつかい木がはえているので、この木陰でひとやすみしようと莫須有先生はおもいつき、元気をふるいおこすようにキッパリというのであった。

「はいはい、着いた着いた」

「まだあと5里もあるよ！」

「キミたち、ここはもう是が非でも、なにがなんでもひとやすみして、莫須有先生にこの木陰で昼寝をさせてはくれまい。吾輩はもはやこの日差しにはたえられそうもないし、たしかに吾輩は30元もっていて、じつはもともと50元だったんだけど、あのズルがしこいやつにダマされてしまって、いつかまた町でやっこさんがあうことがあったらキッチリと片をつけてやるつもりだが、吾輩がおそれているのは、そのときやっこさんがペコペコとへりくだってきたときにまたぞろダマされちまいはせんかということだ。吾輩は腕っぷしの強いやつはちっとも怖くはない、なにせコレラさえも怖くないんだから、腕っぷしの強いやつなんか怖くもなんともないってことはいうまでもないだろ？」

キミたちはだまつて吾輩のいうことをきいておればよいのだ。こんなにすばらしい大樹の木陰をのがすなんて、そんなもったいないことは吾輩にはできん。万が一にも、吾輩がねむりこけているスキをねらって、だれかさんが吾輩の錢をぬすんだり、あるいは吾輩の命をうばったりしても、ちょうど張飛がふたりの手下に殺されたように、もし寝首をかかれるならば、それはもう世のなかがそうなっているんだから、それならそれで仕方がない。ホントのことをいうと、ここまでキミたちはさんざん世話をなつたけれども、ほんの何日かまえのこと、吾輩はすばらしいアイデアをおもいついたんだが、ただそれは吾輩の恋人にむかってはとても口にだせっこないようなことなんだ。吾輩がおもうに、どっちみちなんの意味もないことなのかもしれないんだけど、吾輩は恋人といっしょに旅にてたほうがよいとおもっていて、いっしょに海をながめ、いっしょに飛びこんだりして、そうやって手に手をとって天にものぼるような安らかな心地になったならば、世のうら若き男女のためのお手本となるような物語をつむぐことになって、それは吾輩にとっても名誉なことにちがいないわけで、いわゆる情死ってやつだが、じっさいは自殺しただけなんだろうが、それについても心配なのは、たんに生活が苦しくて死んだとおもわれやせんかということで、それだとちっとも英雄的じやないしねえ。吾輩の恋人よ、おまえはいまどこにいるんだい？ くれぐれもからだを大事にして、みずからの人生を楽しんでおくれ。ひとはだれもみな自分の快樂をいちばんに考えるべきなんだよ。莫須有先生はいまさにロバにのって田舎にやってきたが、ちょうど目のまえにはやすむのにもってこいの場所があるから、どうか心配しないでおくれ」

1 曹植「洛神賦」(『文選』第19巻) 陵波微歩、羅襪生塵(波を陵いで微歩すれば、羅襪塵を生ず) 波をのりこえてゆるやかにゆけば、薄絹の靴から塵がたちのぼる

おやおやどうしたんだろう、大樹のしたには野獸でもいるみたいだけど、まさかオオカミっていうことはないよね？ 莫須有先生はその場に立ちつくし、ビクビクとあたりをうかがう。

「ほら、キミたち、気をつけて、走っちゃダメ、あの木のしたにはなにかがうずくまっていて、われわれの命をねらっているみたいだ」

「莫須有先生、あんた頭がおかしくなったのかい？」

あれはただのラクダだよ」

「ラクダ？ なるほど、ラクダのようだが、ほかにも男がひとり手と足とをのばして寝そべっているじゃないか。吾輩がまちがったのも無理はなくって、キミたちだってずいぶん近づいてからようやくラクダだってことに気づいたはずで、一、二、三、四、五、この五本の木はこんなにでっかいんだから、吾輩が遠くからみてオオカミだとおもってしまったのもしょうがない

ことさ。おお、まるで天高く飛んでるハゲタカのふたつの翼が吾輩のこころをおおいつくすかのようだが、これまでこんなに見事な大樹には吾輩はお目にかかったことはなくって、こんなに背が高くて、こんなに葉っぱが緑で、しかもみっしり繁茂していて、山のなかの吾輩の家もこんなふうな大樹にかこまれていてほしいもんだが、ところで御者さん、あとどれくらいで着くの？」

「だから5里かな」

「じゃあ、こういうふうに伝えられればよいとおもうんだが、莫須有先生の家まではここから5里、その道ばたには5本の大樹がはえており、大樹はひとによつて伝えられ、ひとは大樹によって伝えられ、その名はいつわりなく伝えられるであろう」

（2019、1、15受理）